

特別寄稿

コンラッドの眼の下で

— T. S. エリオットの見た闇の奥 —

野谷 啓二

Abstract The cry Kurtz emits at the “supreme moment of complete knowledge”—“The horror! The horror!”—marks the pivotal point of Joseph Conrad’s literary achievement, and confirms his status of a great novelist connecting Victorian and Modernist literature. T. S. Eliot, soon to be revolutionizing the English poetry, had an idea to use this famous passage for an epigraph to *The Waste Land*, only to be dissuaded by Ezra Pound, his “il miglior fabbro.” Eliot later realized his wish to proclaim his affinity with Conrad or Conrad’s figure Kurtz by putting “Mistah Kurtz—he dead” in the title page of *The Hollow Men*. In this paper, I consider the meaning of the Conrad deduced by Eliot, by exploring Eliot’s interpretation of Conrad’s *Heart of Darkness*.

Eliot’s recognition of modern man’s hollowness resonates with Conrad’s finding of the horror and darkness in the depth of human mind. For Conrad it is the lack of restraint as depicted in Kurtz’s hankering after ivory that represents the sickness of the modern waste land. Man’s attempt to satiate voracious desire results in proving that he is nothing at the core. The man with this recognition must die like Kurtz, and he could live on only if provided with illusion as in the case of Kurtz’s beloved. As if testifying to the truth of Eliot’s saying in *Four Quartets*: “human kind / Cannot bear very much reality,” Kurtz’s fiancée demands Kurtz’s last word “to live her life with” from Marlow. “[O]nly her forehead, smooth and white, remained illumined by the unextinguishable light of belief and love.” I contend, postulating the Holy Cross model of a vertical and a horizontal line in distinguishing the two authors, that Conrad stoically kept to the horizontal line between humans in time and remained to be a modernist in the sense he bore the burden of leaving his novella open-ended, while Eliot, much oriented

towards the vertical, turned out to be an anti-modernist contemplating the timeless communion between God and man. Juxtaposing light with darkness, Eliot found stasis in his Anglo-Catholic faith.

文学に関心を寄せる人であれば誰しも“supreme moment of complete knowledge” (149)¹ に至ってカーツが発したとマーロウが報告する“The horror! The horror!”という囁くような叫び声に、何かしらの反応を示して当然であろう。この場面は 19 世紀文学と 20 世紀のモダニズム文学との結節点に位置するコンラッド文学の、その句の意味とは裏腹に、一つの「至福の瞬間」であると言ってよい。T.S.エリオットも今から 100 年近く前、『荒地』草稿版で確認できるように、20 世紀最大の英詩のエピグラフとしてこの場面をそっくり引用しようとしたのであった。² 当時のエリオットの師匠格で、草稿に「帝王切開手術」³ を施したエズラ・パウンドの「引用に耐えるだけの重みがコンラッドにあるかどうか疑問だ」⁴ という指摘を最終的には受け入れ、出版されたときには消えてしまっていたものの、パウンドに「コンラッドの引用自体を使うなという意味か、それともコンラッドという名前を書くなという意味か」と確認し、さらには「自分の目にとまったもののうちでは最適であり、幾分かは理解を助けてくれる」⁵ ものだとも主張し、なかなかの執心振りを示していた。そしてエリオットは、1925 年にまとめられた「うつろな人々」(“The Hollow Men”)のエピグラフとして、ついに「クルツさん、死んだよ」(“Mistah Kurtz—he dead.”) (150) を掲げ、『灰の水曜日』(Ash-Wednesday)に至る一里塚として、コンラッドの『闇の奥』の世界を配置した。エリオットの世界の見取り図において、コンラッドは救済なき人間界から、神が関与する「秩序」ある世界へ移行する出発点を示しているのである。

常に先行する文学者から引用することを創造規範とし、そうすることによって伝統を意識化し、自らの文学世界の構築と「自己意識」の崩壊を懸命に食い止めようとしてきたエリオットが、20 世紀の人間認識の根底に、そしてコンラッド作品のキーワードとして見出し、自らの詩の世界を表わす「最適の」エピグラフとして選定したこの“horror”という語を *OED* で引

くと、“a painful emotion compounded of loathing and fear”「憎悪と恐怖が入り交った不快感」；“a shuddering with terror and repugnance”「恐怖と嫌悪が伴ったぞっとする感じ」；“strong aversion mingled with dread”「大きな不安が混じった強い嫌悪」；“the feeling excited by something shocking or frightful”「衝撃を与えるか、ぞっとさせる何ものかによって掻き立てられる感情」と定義されている。コンゴ川を下る船上、死の間際に「自身の生を欲望、誘惑、敗北をつぶさにもう一度生き直した」「絶対知の瞬間に」カーツが自ら下した判定である“horror”こそ、『灰の水曜日』にあふれる贖罪意識に至る前のエリオットが、覚醒した近代人の逃れることができない感覚として同定したものであったのであり、この共感こそがコンラッドとエリオットを結ぶ絆であった。『闇の奥』と「うつろな」(“hollow”)、ただ「詰め物をした」(“stuffed”)人々⁶が住む「荒地」の世界を共振させる鍵語は“Shadow; Darkness; Hollowness”であろう。本稿では、カーツの人生の最終認識にエリオットが文学的に感応したこと、コンラッドの **Darkness** とエリオットの **Hollowness** が共鳴したことを出発点に、両者の特徴を探ってみたい。ちょうど一代離れた、31歳年上の先輩文人であるコンラッドを読むエリオット、そのコンラッドを読むエリオットを読み、エリオットに読まれたコンラッドの意味について考え、両者の違いについて考えてみたいのである。

まず、コンラッドのエリオットへの直接的影響関係を先行研究にしたがって確認しておきたいのだが、その際に注意すべきこととして、エリオットの文学批評観がある。1956年にミネソタ大学で行なわれた講演“The Frontiers of Criticism”は「文学批評とは何か」を問う、われわれ文学研究者に大変参考になる文章であるが、そのなかでエリオットは「説明を理解と見誤る間違いを犯してはならない」⁷と主張し、例として John Livingston Lowes の *The Road to Xanadu* を持ち出している。注を入れて600ページを超えるこの浩瀚な著作をいくら読んでも、コールリッジの『老水夫行』(*The Ancient Mariner*)をよりよく理解できたと考える人はいないだろう、というわけである。著者のローズ博士とて、この詩を詩として明らかにする意図など毛頭なかったはず、とも述べている。ただ、コールリッジの読書の断片からなる詩の素材が、彼の詩才によって、いかに消化され、変容されたか、そのプロセスを研究したものであり、それは文学批評の領域(the

frontiers of criticism)を超えるものだと断言している。⁸

実は、このように主張するエリオットには下心がある。自らの『荒地』とコンラッドの『闇の奥』との関連を探る批評家を牽制したいらしいのである。彼は最近受け取ったという、コンラッドと自身との関係を問い合わせる一読者からの手紙を紹介する。その内容は、『闇の奥』にある“the dead cats of civilization” (119)と“rotten hippo” (117)、そしてカーツと『荒地』の71-72行、“the corpse you planted last year in your garden”?’とは何らかの「微妙な」(“tenuous”)関係があるのか、と問うものである。エリオットはこのような探索を「たわごとでしょう」(“This sounds like raving”)と一蹴している。⁹ 彼の詩作方法の批判として、先行詩人の作品からの引用、もっと過激に言えば、剽窃(plagiarism)、盗作、盗用という指摘が常にあり、『荒地』に自注をつけたのも、出版の際に本としての薄さを解消する物理的問題の解決のほかに、出典を示しておくという防衛的意図があったわけである。

エリオットが言うには、詩の素材を明らかにする説明は詩の理解への準備ではあるが、文学批評とは異なるものである。われわれがあくまで目指すのは、「詩が到達しようとしている姿を掴もうと努力すること」¹⁰でなければならない。ハーヴァードの哲学科出身らしく、アリストテレス哲学の「エンテレケイア」という、辞書ふうに定義すれば「たんなる可能性とは対立する完成された現実性」、「質料が形相を得て完成する現実」となる、かなりハードな概念を持ち出して説明している。要するに、causal explanation、すなわち、原因、素材があって、この形を取ったのだ、というような単純な作品説明は拒否されるべきだと考えているのである。講演の先を読むと、「詩が完成したとき、何か新しいこと——先行していたいかなるものによっても完全には説明できないことが起こっている。これが私の言う、創造というものである」¹¹と述べている。エリオットの目的は、先行資料、素材の発掘によって自分の詩業が盗用の誹りを受け、オリジナルな創造作品ではないという批判をかわす防波堤の構築のほかに、コンラッドの『闇の奥』を「資料」に『荒地』群とも呼べる「形相」に至る「エンテレケイア」に着目してほしいという願いを表明することであったとも言えるだろう。

たんなる素材の発掘に終始してしまう「説明」を超え、「理解と喜び」¹²

に向かうべきであり、これこそが文学批評の本質だとエリオットは力説する。「説明」はわれわれを作品の戸口にしか連れて行かない。われわれは作品のなかへと入らなければならない。エリオットにとって、歓迎すべき批評家とは「これまで見たことがなかったものを見えるようにしてくれる批評眼の持ち主」であると言う。¹³ これはあくまで批評について述べたものではあるが、コンラッドがたんなる素材、資料の提供者だったのではなく、新しい目を、これまでなかったものの感じ方、視点を提供してくれた先人、さらに言えば、同じく外から英国文壇に参入した先輩作家として、崇敬のまなざしをもって見ていたことを指摘する表現としても考えられそうである。実際、エリオットが長らく一人で編集した雑誌『クライテリオン』につけた(IIIの“Commentary”)で、1924年のコンラッドの死去に際し、「疑いの余地のない偉大な小説家」であったと賛辞を贈っている。¹⁴ われわれが問うべきことは、コンラッドがエリオットに示した新しいこと、「エリオットに見えるようにしてくれたもの」とは何であったのかということになるだろう。私の考えでは、それはコンラッドの見た **Darkness** とエリオットが同時代人に見出した **Hollowness** の実相である。それはエリオットがコンラッドの世界から抜け出した後には反転し、「光の核心」(“the heart of light”)¹⁵ に、すなわち、キリスト教の神の恩寵、恩恵へとつながるものである。

ここまでの議論で分かるように、私には現在のコンラッド批評で大きな問題となっている植民地主義について、エリオットの政治的イデオロギーと絡めて考察しようという意図はない。もちろん関心がないわけではない。エリオットは批判者に言わせれば「保守反動主義者」、「ヨーロッパ中心主義者」、「キリスト教独善主義者」なのであり、「反ユダヤ主義者」のレッテルすら貼られている。かつて「大英帝国」(The British Empire を「大英・・」と訳すこと自体が当時の「憧れ」を意識化させる)を手本に「大日本帝国」を夢みた日本の一市民として、またイギリス研究者の端くれとして、イギリス帝国と帝国主義にも当然関心がある。正直なところ、藤永茂氏の本にも強い印象を受けた。しかしながら、藤永氏の著作は人間コンラッドの批判であり、文学批評ではないだろう。もちろんコンラッドという人間を批判する自由はある。今日のわれわれの問題を考えるために、歴史的人物を批判することに意味がないとは言えないが、収奪システム構築の主犯がレ

オボルド二世ではなく、もっと大きく“European Mind”にあるとされると気が遠くなってしまうのである。仮に『闇の奥』がキプリングの言う「白人の重荷」(“white man’s burden”)論に支えられた帝国主義的収奪システムを肯定するヨーロッパ文化の産物であったとしても、それは資料として読んでいるのであって、作品の真実、エリオットの言う「エンテレケイア」を示していないように思われるのである。藤永氏は言う、

クルツを地獄の闇の奥に引きずり込む強烈な魔力を原始のアフリカは持っていた。文明社会の制約を振り切ったクルツを待っていたものは地獄への転落でしかなかったが、さすがにクルツ、めそめそと泣き声立てて死んでいったのではない。地獄の闇を正面から見据えて彼岸に渡っていったのだ。この世紀末のアンチヒーロー的な文学的ひねりをコンラッドがクルツに与えたことで、『闇の奥』はT.S.エリオットに高く買われることになったのである。¹⁶

最後のエリオットをめぐる評定は看過できない。確かにエリオットはカーツの洞察、Darkness の認識によって発せられた“The horror”に心を動かされてはいるが、カーツに同情し、同化しているわけでは決してない。カーツに「アンチヒーロー」の姿を見る読みは、あまりにもヒューマニスティックな、人間至上主義的読み方ではないだろうか。私にはエリオットはあくまでカーツを、「うつろな人々」の典型として見ているにすぎないと思われるのである。

それではカーツの叫びにどのような意味を付与すべきなのか。これはリアリティ真実の発見に由来する言葉であり、これまで善であると認識していたものが、実際には人間の欲望に過ぎなかったのだという発見から来る、恐怖と嫌悪が交錯した感情なのではなかろうか。日常の世界に潜む「悪」が明らかになったときに発せられる声である。これは帝国主義論の背景にある「野蛮」と「文明」という二項対立では処理できないものであろう。先に引用した OED の定義を思い出してみれば、“horror”とは「憎悪と恐怖が入り交じった不快感」、「恐怖と嫌悪を伴ったぞっとする感じ」であり、「大きな不安が混ざった強い嫌悪」、「衝撃を与えるか、ぞっとさせる何物かによって掻き立てられる感情」である。これは自分を越えたもの、外在と内在の別

を問わず、自分の対処能力を超えたものに対して感じる人間的な感情なのであり、自らの安全を保障するためには遠ざけておきたいものに対する、強い拒絶反応として現われるものである。死の瞬間にカーツが見たヴィジョン、真実の認識として発せられた“horror”という言葉にエリオットの「うつろな人間」が「一步も近寄りたくはない」(“Let me be no nearer”)と願う真実とは何であろうか。それは、後程見ることになるが、『闇の奥』でしばしば繰り返される言葉である“restraint”「抑制」を失くした人間が自己の生を凝視したときに気づかされる、善の欠如としての「無」(nothingness / hollowness)なのではないだろうか。そこで、エリオットの文学批評観にできるだけ寄添いつつ、荒地の世界のなかのコンラッドに着目してみよう。私が確認したいのは、コンラッドとエリオットに共通する近代人を見る観察眼である。『闇の奥』には「うつろな人間」が住む荒地が見える。そこには西洋近代の個人、自我意識を膨満させた人間の姿がある。

エリオットがコンラッドに親和性を感じ、自らの文学的営為にコンラッドを読んだ体験を織り込んでいったことを明らかにしてくれるのがマコンネルの論文である。¹⁷ 半世紀以上前に書かれたものではあるが、西洋近代文明の危機の主調音として hollowness と darkness を聞き取ろうとするもので、コンラッドとエリオットの作品の照応関係について説得力を持って指摘してくれる。マコンネルはまず「うつろな人々」IIIの第3スタンザの2行目、“The supplication of a dead man’s hand”「死者の手の哀願」にカーツの姿をだぶらせる。第二に、『荒地』のIIに描かれるテムズ川を航行する「はしけ」の“barges drift”、“red sails”といった表現、さらに、伝統的価値の喪失の時代である現代から過去の栄光（エリザベス1世女王時代）へと遡る点と、『闇の奥』の冒頭におけるテムズの歴史的回顧との照応にわれわれの注意を向ける。こうした共鳴は、コンラッドの世界がエリオットの世界に接続されていることを実感させ、重層的な読みを確かに可能にしてくれるものである。

マコンネルが提示するカーツの人物解釈にも見るべき点がある。彼は死んだカーツを勝利者とし、マーロウの視点からにせよ、自己の生命と引き換えに「予言者的な知」を獲得した一種の英雄とみなしている。カーツはコンラッド文学に登場する「生の閾を超えた」(beyond the pale of life)存在

の一人として、ジャングルの闇の奥で、自分自身を果てしない欲望の塊と見定めたにもかかわらず、原住民からは神のように崇拜される逆説に引き裂かれる。アイルランドの植民地支配の歴史を色濃く反映する表現「防護柵(Pale)を越えて」、イングランドの文明が及ぶ柵の向こう側、すなわち身を守るものがない境遇に人間の「無」の実相を直視し、それを horror と認識し得たカーツは、一種の覚醒した超人とも言えるからである。そのうえで、その知によってカーツが見ることを許されたヴィジョンを、キリスト教の救済である、神とあいまみえることを意味する「至福直観」(beatific vision)をもじって「悪魔的な至福直観」と表現しているが、これは示唆に富む見解であろう。さらに、「カーツはわれわれの文化に生きるすべての『うつろな人間』を表わし、理性を失い狂気となり、忌まわしきもののみを求めめる精神の象徴である」¹⁸、という指摘も参考になる。マコンネル論文は「善」が「悪」となり得ること、人間精神には「善」を「悪」に変える働きがあることを指摘している。

昨年の初め、エリオットの死後 50 周年を記念して出版された浩瀚な伝記 *Young Eliot Young Eliot : from St Louis to The Waste Land* (Jonathan Cape, 2015) の著者であるロバート・クロフォードにしたがえば、「エリオットは『闇の奥』を読むことで、「墓のような都市」(“sepulchral city”)であるブリュッセルとともにロンドンを闇の都市として意識化し、『荒地』に現われる「非在の、非現実の都市」(“unreal city”)として定着させたのである。¹⁹

アメリカン・ルネサンスの研究に大きな足跡を残した F.O.マシーセンは、エリオット研究の初期を代表する学者でもあるが、彼が注意を促すのは『ねじの回転』で悪を描こうとするヘンリ・ジェイムズの努力に言及して述べた、「evil[罪悪]は稀であり、bad[悪]はしばしば存在する。evil は少数の人にしか知覚できない」というエリオットの発言である。エリオットは「善悪に対する本質的な関心で、ジェイムズに匹敵するのはホーソン、ドストエフスキー、そして『闇の奥』のコンラッドである」と考えていたようである。²⁰ 先のクロフォードも、この後につづく言葉を引用している。すなわち、「真の evil と bad との関係は、聖人性および英雄的資質と礼儀正しい行動との関係に等しい」。²¹ ここでわれわれは二人の文人の関心に見られる位相の違いに気づかされるはずである。エリオットはどうしても縦軸を、

超越的な存在である神から人間界に伸びる垂直軸を前提に思考する。それゆえに evil は神との関連で意識化され、人間的地平に、水平軸に沿って立ち現れる bad とは根本的に異なるものとされるのである。このことについては後にまた触れることになる。

エリオットがコンラッドに惹かれた理由は、この「悪に対する強い関心」であったと言ってよい。このエリオットの関心のありようを理解するために、『異神を迫いて』の一節を参照しておきたい。彼が主張するには、「原罪という観念が消えてしまい、強烈な道徳的葛藤の観念が消滅すると、文学に表現される人間はますます真実味を失っていく」^{リアリティ}のである。エリオットの反近代主義の信念と態度を鮮明に刻印するこの評論から知られることは、善悪の関心(moral preoccupation)がエリオットの文学評価基準のなかで一貫して重要な位置を占めているということである。エリオットは、これは「考え、感じる人にとって大きな関心事であるはず」であるが、「欧米の同時代小説を探してみても見つからない」²²と嘆いている。おそらくマシーセンが参照したであろう以下の文章は、エリオットの問題意識を明確に語るものであり、デジタル出版された今では散文全集で容易に読めるようになってい

(ホーソンの短編小説の) 魅力は人間の魂と良心のもつ深い神秘の全貌を垣間見せてくれるところにある。彼の短編は道徳的であり、その関心も道徳的なものだ。たんなる偶然や因習、生活の表面的な出来事を超えた何ものかを扱っている。ホーソンのすばらしいところは、深い心理に関心を持ち、彼なりにそれに通暁しようと試みたところにある。²³

エリオットが同時代の文学に不満を抱くのは、ホーソンに見出すことができるような道徳的関心が欠如しているためであり、しかもそれは、エリオットの時代の小説に広く共通する欠陥だと言う。「道徳的関心」は「考え、感じる人々の精神のなかでますます幅をきかせる」ようになっていにもかかわらず、「現代英文学の小説は時代について行けず、精神分析研究に直接的な影響を受けるか、精神分析によって醸成された雰囲気に影響されるか、あるいはまた精神分析から逃れたいという願望に触発されているかの

どちらかなのである」。そのためにヘンリ・ジェイムズが常に追求していた『深遠さ』を喪失している。²⁴ ここでエリオットが問題にしている道德とは、人間と人間の間で生起するものという意味で水平軸の上に意識化されるものではない。「罪惡」が成立するための要件として、神のような超越的存在が前提とされており、それだからこそ彼は「原罪」という神との関係で成立する用語を使用しているのである。エリオットの考える道德とはあくまで神的な存在との関係によって意識化されるものである。

つづいてエリオットはコンラッドに加えてヴァージニア・ウルフにも言及しながら、つぎのように述べる。「原初的なものに代わって、ウルフは高度に文明化したものを探求する。ウルフはコンラッドを思い出させるが、何かが意図的に除かれている。コンラッドの作品に存在する強い男——自然の力を相手に闘う孤独な男を取り除けば、ウルフの作品が出来あがる」。コンラッドの小説に登場する「強い男」は、「シェイクスピアやラシーヌの深い心理、道德的問題の小型化された名残」²⁵なのであるが、エリオットはそれなりの評価を与えている。

コンラッドの小説をエリオットの同時代の小説家、例えばウルフの作品と比べて高く評価する結果をもたらす道德重視の姿勢を理解するためには、「牧師の息子」、ヒリス・ミラーの論考²⁶が参考になるであろう。ミラーは悪の注視を近代人のニヒリズム体験と結びつけ、その最初の代表者としてコンラッドを考えている。ミラーの著作は、18世紀後半にロマン主義が登場したのと同じような劇的な変化が20世紀前半に起こったとし、その変化とはどのようなものであったかを探るものである。20世紀の詩は、たんなるロマン派の詩の延長ではなく、それを超えるものであり、20世紀詩人の多くが共有するのは、ニヒリズム体験だと言う。ミラーはコンラッドを、ニヒリズムを徹底的に押し進め、それを超克する道を準備した作家と規定し、エリオットをコンラッドの後続詩人として捉えている。ミラーの言うニヒリズムとはどのようなものであろうか。

神と被造物が人間の意識の対象となる時、人間はニヒリストとなる。意識がすべてのものの基礎となる時の、意識の完全なる空虚さがニヒリズムである。人間がすべてのものを自己の意識に同化させ吸収するとき、人

間が設定する恣意的な価値しかなくなる。ニーチェの価値変更は、絶対的価値とすべてのものの価値の源としての神を消去するものである。神の死後の空白に残された人間は、すべてのものの物差し、最高の評価者となる。²⁷

神と被造物が人間のなかに取り込まれ客観性を喪失するとき、人間はニヒリストにならざるを得ず、神を消去し始めた近代の、人間を中心に置く基本姿勢、すなわちヒューマニズムというものは、最高の結果を招来させたかに見えて、その実、絶対的孤独の無価値のなかに沈降することになる。ミラーの立論の背景には、存在するものすべてがまさにその存在を実現するためには人間の意識にのぼらなければならないということから来る、ものが現象する「空洞の」(hollow)領域としての人間があり、その意識のなかに、すべてのものを支配する意思として、すべてを喰らい尽くすブラックホールのような空虚が立ち現われるという人間の状況がある。²⁸ このような近代人のニヒリズムを意識した存在が『闇の奥』の主人公カーツであり、徹底した象牙収集に明け暮れる彼は、まさに神の死以後の人間中心主義を体現する存在であり、「自己抑制を欠落させた」(lack of restraint)人格として描き出されている。

ミラーは近代文化の陰に隠れていながら優勢となったニヒリズムを描き出す能力のゆえに、「コンラッドが英文学において占める特別な地位」²⁹を称揚する。自分の絶対的意志に立ち向かうものをすべて破壊しようとする欲望に肥大化してしまった自意識は、自己の空虚さの暴露に終わるわけである。そしてその空虚を、ニヒルを詰めもののように内包させる「うつろな人々」の奥底には闇しかない。カーツの貪欲な意志がカーツの無、空虚さをかえて明らかにするのである。世界の暗黒の未開地を文明化する善意の計画は、人間の絶対的意志に立ちはだかるものすべてを破壊したいという意識的な願望となる。カーツの意志が無限に広がったとき、その実体が姿を現わす。カーツはその実、空虚である(Kurtz is “hollow at the core.”)。その空虚に闇が入り込む。³⁰

このような自己肥大化の象徴としての闇はすべての近代人の心のなかにも存在するが、それも打ち破られるときがあるとミラーは考える。未開の土地がカーツを見出し、「途方もない侵入に対して恐ろしい復讐を遂げると

き」、ニヒリズムからの脱出口が現われ出る。なぜなのか、その論理は容易には理解できないが、ニヒリズムの道を押し進めると、なかば予定調和的に脱出口が姿を現わすとミラーは言いたいようである。つぎの引用はディコンストラクショニストとして有名となるミラーではあるが、若かりし頃の批評眼にはキリスト教的信条が露わになる瞬間があったことを示している。「ニヒリズムの道を最後まで進むと、人間はふたたび『自己の外に存在する霊的な力』(“a spiritual power external to himself”)に直面する。この力は言い表わすことができないほど恐ろしい恐怖として現われるが、主観主義から脱出する可能性を与えてくれる」。³¹

要するに主観主義から抜け出ると、自我を超える何ものかのうちに脱出口、救いを見出し、ニヒルな自己に閉じこもる牢獄から離脱する糸口が現われる。ミラーは、カーツの自我が未開の土地の力に貫かれたときに起こったあのホラー認識を、カーツの外に存在する自我を超えた何ものか、何らかの霊的力の認識と考え、カーツが救いの端緒についたと見ている。³²このような理解は、ミラーの多分にキリスト教的世界観に依拠するリアリティ論、近代の人間の問題となったニヒリズムの超克論のなかのコンラッド論、またカーツ論なのであり、多少行き過ぎた評価ではないかという気がしないでもない。私としては、カーツは救済の糸口に立つ存在であるよりも、ホラーの発見者、新しい実相、リアリティの発見者として、ミラーの言葉を借用するなら、ただ「自然が恐ろしい復讐を行なう」対象にとどめるほうがよく、エリオットが表象する「うつろな人々」の最たる例とみなしたい。エリオットがカーツに引きつけられたのは救済される者としてではなく、あくまで自己抑制を失った近代人の代表としてであったのである。

つぎの文章は宗教信仰を告白する文書ではないかという印象すら残すものである。先に私がミラーのことをあえて「牧師の息子」[実際に彼はバプテスト派の牧師の子供である]と呼んだゆえんである。

裸足でリアリティのなかに歩を進めて行くとは、自我の独立を放棄することを意味する。自己の精神はすべてを自分の対象にするのではなく、リアリティを前にして自己を消し去らなければならない。あるいは、自身を超

えて、自分が創ったのではない環境に精神を消散させ、外的世界の濃密さのなかに飛び込まなければならない。リアリティの前に自我を消し去るということは、ものに対する支配の意志を捨てることである。これは近代人には達成がもっとも困難な行為である。われわれの文化のあらゆる傾向に逆行するからである。支配の計画を放棄するには、意志は意志しないことを意志しなければならない(“the will must will not to will”)。意志の放棄をとおしてのみ、ものはそれ自身の形で、その存在の完全性をもって現われ始める。³³

ヒリス・ミラーの読みに依拠しつつ、モダニスト詩人を先導するコンラッドの役割について考えてきた。ニヒリズムを超克する道を開いたかどうかはともかく、その極限まで歩を進めたという評価は、エリオットによっても共有されるであろう。

近代人にとっての「存在」の宿命的真実^{リアリティ}としてのニヒリズム、その「耐えられない重さ」を描く作家コンラッドの姿を捉えたもう一人の批評家にゲコスキーがいる。³⁴ 彼は『闇の奥』の終わりがほめかしているのは、「真実は日々の生活では耐えられないものであり、安全と慰めを確保しつづけるためには、忠実でいられる何らかの『幻想』を必要とする」³⁵ ということだという、重要な指摘を行なっている。以下はマーロウがブリュッセルにカーツの婚約者を訪ねたときのやり取りの一部である。

“I was on the point of crying at her, ‘Don’t you hear them?’ The dusk was repeating them in a persistent whisper all around us, in a whisper that seemed to swell menacingly like the first whisper of a rising wind. ‘The horror! The horror!’

“‘His last word—to live with,’ she insisted. ‘Don’t you understand I loved him—I loved him—I loved him!’

“I pulled myself together and spoke slowly.

“‘The last word he pronounced was—your name.’

“I heard a light sigh and then my heart stood still, stopped dead short by an exulting and terrible cry, by the cry of inconceivable triumph and of unspeakable pain. ‘I knew it—I was sure!’ ... She knew. She was sure. I heard her weeping; she had hidden her face in her hands. It seemed to me that the house would collapse before I could escape, that the heavens would collapse

before I could escape, that the heavens would fall upon my head. But nothing happened. The heavens do not fall for such a trifle. Would they have fallen, I wonder, if I had rendered Kurtz that justice which was his due? Hadn't he said he wanted only justice? But I couldn't. I could not tell her. It would have been too dark—too dark altogether. ..." (161-62)

マーロウ、そしてその背後にいるコンラッドの認識では、真実を語ること、それを啓示することはあまりにも暗すぎることである。真実の重さに耐えられない人間は、「残りの人生を共に生きるためのカーツの最後の言葉を心に留めたい」カーツの婚約者のように、unreality を必要とするのである。彼のことを一番に愛している自分の名前を呼ぶ声であるはずと確信していても、たとえそれが他者から見れば「幻想」であっても、それを必要とするというのが、ゲコスキーが読み取るコンラッドの人間観である。

『荒地』のロンドンと並ぶ「非在の都市」(“unreal city”)であるブリュッセルの一室で、カーツ自身が正義のみを要求していたのだから、その正義を追求して婚約者に真実を明かしてもよかったのだが、マーロウもまた真実の重荷に耐えかね[彼は天が落ち、家が崩れ落ちるのではないかとさえ感じた]、嘘について彼女の残りの日々を生きるための幻想を与えてしまう。思い出せば、この場面に至る前にマーロウはつぎのように観察していた。

‘You knew him best,’ I repeated. And perhaps she did. But with every word spoken the room was growing darker, and only her forehead, smooth and white, remained illumined by the unextinguishable light of belief and love. (158)

ここでわれわれは“darkness”に対応する“light”に着目しなければならないだろう。コンゴのジャングルの闇に呼応するかのように、“unreal city”で「カーツを一番よく知っていた」という虚偽を語る彼女の一つひとつの言葉によって、部屋はどんどんと明るさを失い暗くなるのである。ただ、彼女のカーツに対する「確信と愛」の「消すことができない光」だけが彼女の額を照らしつけた。

...bowing my head before the faith that was in her, before that great and saving illusion that shone with an unearthly glow in the darkness, in the triumphant darkness from which I could not have defended her—from which I could not even defend myself. (159)

マーロウは彼女の確信に、信仰と言ってよいものに、彼女が胚胎する暗闇のなかで、この世のものとも思えない輝きを放つ、人を救済する「幻影」を前にして頭を垂れる。彼女だけではなく、自分自身すらも護ることができなかつたであろう「勝ち誇る暗闇」のなかで、この世のものとも言えない輝きを放つのは「幻影」なのである。人間は、エリオットが後に『四つの四重奏』(*Four Quartets*)で洞察したように、「あまりにも多くのリアリティには耐えられない」(“human kind / Cannot bear very much reality”)のである。自己抑制を欠いた荒地の住人である近代人は「うつろな人」にならざるを得ず、闇の奥でカーツが響かせたものは自分自身の心の空洞を揺らす恐怖のこだまであった。自己理解の瞬間、カーツは息絶える。マーロウが生き延びるのは、カーツの最後の言葉を知らせずに嘘をつく、婚約者に真実を話さなかつた「自己抑制」のおかげであった。マーロウは自分勝手にカーツを信じる彼女に対する怒りに代わって無限の憐れみを感じるのである。

オックスフォードにおける博士論文をまとめたゲコスキーのコンラッド論は説得力に富むものだが、つぎの引用は、ミラーの指摘した近代人のニヒリストとしての特性、すべてのものを自らのなかに取り込む欲望に支配されている状況をうまく言い当てている場面である。

I saw him open his mouth wide—it gave him a weirdly voracious aspect, as though he had wanted to swallow all the air, all the earth, all the men before him. (134)³⁶

狂気と化したカーツの欲望は、『闇の奥』でしつこいほど繰り返される語であり、この小説のキーワードでもある「抑制」(“restraint”)の欠如が原因であり、彼が殺戮し、自身の住居を取り巻くように晒し者にした原住民の頭部がそれを物語る。

They [heads] only showed that Mr. Kurtz lacked restraint in the gratification of his various lusts, that there was something wanting in him—some small matter which, when the pressing need arose, could not be found under his magnificent eloquence. Whether he knew of this deficiency himself I can't say. I think the knowledge came to him at last—only at the very last. But the wilderness had found him out early, and had taken on him a terrible vengeance for the fantastic invasion. I think it had whispered to him things about himself which he did not know, things of which he had no conception till he took counsel with this great solitude—and the whisper had proved irresistibly fascinating. It echoed loudly within him because he was hollow at the core.... (131)

これまで述べてきたカーツが象徴する近代人の特徴がすべてこの一節に描かれている。人生の最後の瞬間に、自身が抑制を欠いていたという認識に至り、カーツは“The horror! The horror!”と、ある特定の恐怖を意味しつつ、定冠詞をつけて囁くのである。近代人の病根としての人間中心主義の表われとして、飽くことなき欲望をもつカーツは、「未開の土地」、コンゴのジャングルで、自己の内部を注視し、正気を失う。

But his soul was mad. Being alone in the wilderness, it had looked within itself, and, by heavens! I tell you, it had gone mad. I had—for my sins, I suppose—to get through the ordeal of looking into it myself. No eloquence could have been so withering to one's belief in mankind as his final burst of sincerity. He struggled with himself, too. I saw it, I—heard it. I saw the inconceivable mystery of a soul that knew no restraint, no faith, and no fear, yet struggling blindly with itself. (145)

ただし、*restraint* には自由を奪われた状態、拘束、拘禁という意味があることも忘れてはならない。これまではもっぱら近代人の特徴としての「自己抑制の欠如」の意味で *restraint* を考えてきたが、カーツはアフリカと精神の闇の奥で、自己の欲望を制御しなければならないという価値観が支配する既知の世界(Pale)から逃れ、自由の身となり、ニーチェ的な超人、原住民にとっては神的な存在にもなった。しかしそうした自己把握の瞬間に、

実はこの境地こそが「脱出不可能な監獄」(Kurtz in restraint)につながれている状態であるという「完全なる知解の至高の瞬間」(supreme moment of complete knowledge)が重なるのだという解釈も成り立つであろう。The horror とはカーツの逆説認識の叫びなのである。

狂気から身を護るために必要な自己抑制は、どのようなものであってもよいようである。マーロウがコンゴ川を遡上する船に乗り込んでいる原住民が、空腹にもかかわらず人肉食を思いとどまる抑制でも、またマネージャーの、たんに体面を保つための抑制でもよい。逆に、マーロウが雇用されるきっかけとなった、2羽の雌鳥をめぐって族長を殺害してしまったフレスレヴンは怒りを抑制できなかったために命を落とし、マーロウが心を通わせるようになった操舵手が死んだのも、シャッターを閉めておくという抑制を忘れたからであった。

ミラーは真実の問題の所在を明らかにした小説家として、コンラッドをヴィクトリア時代から現代のモダニズム文学の側にぐっと引き寄せたのだが、真に偉大な詩人エリオットを称揚するためには、つぎのような説明を加えた。「真の詩人とは、自我のまわりに群がる分裂した要素を調和の取れた秩序(“harmonious order”)に統合できる人間である」。³⁷ カーツはアフリカという未開の大地に侵入することにより、文字通りに荒地の住人の代表となった。他方、彼を送り出したブリュッセルの植民会社とその都市住民は、エリオットが描き出したロンドンの「うつろな人々」が住む精神の「荒廢国」(The Waste Land)に属する人々であると炙り出すこともできる。コンラッドに注がれるエリオットの目には、彼が中世と近代を分ける分水嶺の指標として、評論「形而上詩人たち」(“Metaphysical Poets”)のなかで指摘した「感性の分裂」(“dissociation of sensibility”)を経験した近代人の人間状況を観察し、それを文学として描いて見せた先人に対する尊敬の念、感銘を読み取ることができるのではないだろうか。

ここまではよいとして、真にエリオットが直面した課題は、コンラッドを超えたその先をどうするか、カーツのように死なないとしたら、どのように生き、どのような詩を書くかという「とてつもない問題」(“The overwhelming question” [Prufrock])であった。『荒地』以降、否、『荒地』のなかにすでに認められるのは、キリスト教信仰[アングロ・カトリシズム]

の発見、帰依へと向かう、モダニズム文学の基本姿勢に逆行する傾向である。エリオットは人間だけの世界をうつろなものと感じ、彼の志向性は「世の始まり」(アルファ)から「世の終わり」(オメガ)へと向かう時間の横軸に神の摂理の縦軸を交差させる「十字架モデル」を意識化させ、神の秩序によって生きることを命じた。

エリオットとコンラッドの違いが明らかになった。文学には二種類の感動がある。コンラッドの感動は、われわれとの近接性に由来する。彼は人間の地平に踏み留まるなかで徹底的に人間の問題を追及する。『荒地』に至るまでのエリオットも、この神なきあとの人間の実相を見つめる文人たちの共同体に入れてもよい。しかし、その後のエリオットとわれわれとの間には距離が生じる。上述したように、エリオットは人間の時間の水平軸に神を導入し、垂直軸を交差させたからである。“human kind / Cannot bear very much reality.”同時代の人間にカーツの姿を見出したエリオットは、「超人」を承認せず、“humility is endless”³⁸を生の英知と規定する。キリスト教は究極的な救世主がいずれ到来するという希望に生きるユダヤ教のメシア信仰に根差すが、父なる神が一人子イエスを救い主としてこの世に派遣されたと信じる宗教である。神が人となること(Incarnation「受肉」、カトリック教会の言葉でいえば「托身」)によって、繰り返すが、時の始まりであるアルファからその終末のオメガに至る時間の水平軸に交差する一本の垂直軸が走ることになる。父から派遣され、自己を贖罪の羊として奉獻する子なる神が、人の時間のなかに幼子として誕生したキリストの生誕——クリスマス——は、神の人類史への介入、神の言葉であるイエスの受肉として祝われる。罪に縛められた人間を解き放つために神が世へ自己を譲渡し、自己を告知することが受肉の意味なのである。こうして歴史——アルファに始まりオメガに至る時間の流れ——は救済史として意識される。神であるロゴスに耳を傾けない状態こそが罪であり、新しいイスラエルとして教会が成立した以降は、その教会をとおして神の言葉を聞くことが正統キリスト教の信仰となった。近代の世俗化という現象は、垂直軸の存在意識を喪失することであり、神が人類史に介入しているという摂理的な感覚を喪失していくプロセスと言える。人間的地平に留まり、解決なき状態のままオープンエンドの世界を描かざるを得ないモダニズム文学から、エリオットは

救済の文学に歩を進めることになった。たとえそれが同時代人にとっては後ろ向き、progress（進歩）ではなく regress（退歩）と映ったにせよ。

キリスト教特有の水平軸と垂直軸の意識化によって、エリオットはとにかくには近寄れない存在になった。近代の人間の多くはこの垂直軸を共有できないからである。このことは E.M.フォスターも証言している。³⁹ エリオットの詩の特性はその“bits and pieces”を集めた断片性にある。エリオットにとって重要なことは、この断片群に sequence、ある一つの方向性を与え、秩序を見出すことであった。『荒地』の言葉で説明すれば、“These fragments I have shored against my ruins”「断片によって自分の破滅を食い止める」といったぎりぎりの作業が行われていたのである。断片のなかに秩序と完全を求めるエリオットは、「うつろな人々」の I に見られるように、「生の闕を超え」、「死の別の王国」(“Death’s Other Kingdom”)に入りたいと、聖人の助けに寄りすがるかのように見える(“Those who have crossed / With direct eyes, to death’s other Kingdom”)。エリオットの場合“Heart of Darkness”に留まることができず、そこから“heart of light” (『荒地』のヒヤシンス娘)へと向かう転回が不可欠となった。エリオットはキリスト教信仰を基盤に、保守化して体制のなかに安定をもとめることによって、20世紀初頭の「荒地の問題」に解決を見出した。エリオットにとっての死活問題は、いかに“our lost kingdoms”から抜け出るかということであった。そのために“hollow men”、詰め物をした「ぬいぐるみ」のような“stuffed men”は、詩の終わりで、詰め物、すなわち一切の邪念を放棄し、真の意味で空白の“empty men”に変貌を遂げる必要があった。

Sightless, unless
The eyes reappear
As the perpetual star
Multifoliate rose
Of death’s twilight kingdom
The hope only
Of empty men. ⁴⁰

この変更が重要な意味を持つものとする、十字架のヨハネ的に、人間は

神の恩寵を受け入れる器となるわけである。そのとき、「神の前における人間の魂と行為の善さ」⁴¹と規定される「信」、「望」、「愛」のキリスト教枢要徳のうちの希望が、聖母マリアの慈愛のこもった眼差しが多弁のバラとして再び現われるまでの希望が生じてくる。Hope、希望がエリオットの「うつろな人々」にはあることに着目しておきたい。しかるにコンラッドの場合はどうか。徹底して横軸の物語になっているのではないだろうか。Illusion、幻想は現世的な、エリオットの言う“Death’s dream kingdom”での救いでしかない。カーツは illusion から解放され、マーロウの地平を超越することができたが、“supreme moment of complete knowledge”は彼に死をもたらしたのである。悟りを開き、幻影から見放されると、死ななければならない。それはマコンネルが見定めた“diabolic beatific vision”に過ぎず、エリオットの“Death’s Other Kingdom”に届くものではない。しかし、その「救いのなさ」にわれわれが感動することも確かである。カーツはエリオットの「うつろな人々」につづく作品、『灰の水曜日』の「罪を償う世界」に、ついぞ入ることができない。コンラッドは持ち前の強靱な人間精神で、リアリティに、近代人が直面せざるを得ないとミラーが言うニヒリズムの問題に、ただひたすら正面から向き合ったように思われる。超越的なものの介在を求めるといふ方向性はなかったのではないだろうか。それが本当なら、なぜそうなのか、コンラッド協会の会員諸氏のご見解をお伺いしたいところである。

本稿は2015年11月7日第2回日本コンラッド協会年次大会（於、関西学院大学梅田キャンパス）で行った講演をまとめたものである。なお、本研究の一部はJSPS科研費(15K02303)の助成を受けている。

注

¹ *Heart of Darkness* からの引用は The Medallion Edition Vol. 6 から行ない、ページ数を括弧に入れて示す。

² Valerie Eliot ed., *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts Including the Annotations of Ezra Pound* (Faber and Faber, 1971), 2-3. タイプライ

ターで“Did he live his life again in every detail of desire, temptation, and surrender during that supreme moment of complete knowledge? He cried in a whisper at some image, at some vision, –he cried out twice, a cry that was no more than a breath –

“The horror! the Horror!”

と打ったあと、エリオットの手書きで Conrad と書き入れている。なお2度目の“Horror”が大文字となっているのは、エリオットによるもの。

- ³ “Ezra performed Caesarian Operation”、パウンド自身の言葉。
- ⁴ “I doubt if Conrad is weighty enough to stand the citation.” *The Letters of T.S. Eliot: Vol. I: 1898-1922*, ed. by Valerie Eliot and Hugh Haughton. Rev. ed. (Faber and Faber, 2009), 625.
- ⁵ “Do you mean not use Conrad quot. or simply not put Conrad’s name to it? It is much the most appropriate I can find, and somewhat elucidative.” *Ibid.*, 629. エリオットの再婚した元秘書 Valerie Eliot が夫の死後 BBC で語ったつぎの言葉も興味深い(2 Nov. 1971). “Pound left the decision to him, so he omitted the passage, a fact which he later regretted.” *Ibid.*, 630.
- ⁶ 「うつろな人々」の本詩に添えられた一行“A penny for the Old Guy”は、プロテスタンティズムを国是とする国民国家イギリスの中核を成すイングランドの、カトリシズム拒否の姿勢を文化的に定着させるための記念日「ガイ・フォークス・デイ」(11月5日)に焼かれる人形、そのための小遣いねだりの言葉であるが、「オールド・ガイ」とはエリオットの詩想のなかでは、「すべての救済なき人間」を意味するのであろう。
- ⁷ *On Poetry and Poets* (Faber and Faber, 1957), 109.
- ⁸ *Ibid.*, 108.
- ⁹ *Ibid.*
- ¹⁰ *Ibid.*, 110.
- ¹¹ Eliot, *op. cit.*, 112.
- ¹² *Ibid.*, 116-17.
- ¹³ *Ibid.*, 117.
- ¹⁴ *The Criterion: A Quarterly Review* Vol. III, No. 9. (October, 1924), 1.
- ¹⁵ 『荒地』41行目.
- ¹⁶ 藤永茂『「闇の奥」の奥』(三交社、2006年)、146.
- ¹⁷ Daniel McConnell, “‘The Heart of Darkness’ in T.S. Eliot’s *The Hollow Men*” in *Texas Studies in Literature and Language*, Vol. 4. No. 2 (Summer 1962).
- ¹⁸ *Ibid.*, 147.
- ¹⁹ Robert Crawford, *The Savage and the City in the Work of T.S. Eliot* (Clarendon Press, 1987), 139.

- ²⁰ “Evil is rare, bad is common. Evil cannot even be perceived but by a very few.” F.O. Matthiessen, *The Achievement of T.S. Eliot* (Oxford University Press, 2nd ed., 1947), 24.
- ²¹ “Real Evil is to Bad just as Saintliness and Heroism to Decent Behaviour.” Crawford, 168.
- ²² *After Strange Gods* (Faber, 1934), 42.
- ²³ “The Contemporary Novel” in R. Schuchard et. al. eds., *The Complete Prose of T.S. Eliot III* (Johns Hopkins University Press, 2015), 88.
- ²⁴ *Ibid.*, 89.
- ²⁵ *Ibid.*, 91.
- ²⁶ J. Hillis Miller, *Poets of Reality: Six Twentieth-Century Writers* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1965).
- ²⁷ *Ibid.*, 3-4.
- ²⁸ *Ibid.*, 4.
- ²⁹ *Ibid.*, 5.
- ³⁰ *Ibid.*, 6-7.
- ³¹ *Ibid.*, 7.
- ³² カーツを断罪すべき人間ではなく、近・現代人の宿痾を認識し得たという意味で積極的に評価する見方が可能である。Cf. Elizabeth Daumer, “The Hollow Men” in David Chinitz ed., *A Companion to T.S. Eliot* (Wiley-Blackwell, 2009), 171. The theme of self-knowledge acquired through the unflinching confrontation with the shadow that falls between ideal and reality is central to “The Hollow Men,” whose speakers evade what Kurtz had the courage to face with “direct eyes”: the truth about themselves. 自己認識を獲得したカーツは「うつろな人々」ではなくなる。このことを“evil”と“bad”という語を使って表現すれば、カーツは自身の数々積み重ねた所業が“bad”から“evil”であったという認識に至って“The horror! The horror!”という叫びをあげたことになる。
- ³³ Miller, 7-8.
- ³⁴ R.A. Gekoski, *Conrad: the Moral World of the Novelist* (Paul Elek, 1978). 彼は今では学者を辞め、店舗を構えず稀覯本を商う古書店主となり、実に面白い『トールキンのガウン』（早川書房、2008年）などの著作で知られる人物となっている。
- ³⁵ *Ibid.*, 90.
- ³⁶ You should have heard him say, ‘My ivory.’ Oh yes, I heard him. ‘My Intended, my ivory, my station, my river, my—’ everything belonged to him. (116)
- ³⁷ Miller, 148.

38 エリオットの『四つの四重奏』の一つ、“East Coker”の II に見える言葉。“The only wisdom we can hope to acquire / Is the wisdom of humility: humility is endless.”

39 コンラッドが見定めた「恐怖」について E.M.フォースターが興味深い洞察を記している。「生きていく上で経験する恐怖に関して、人は三つの種類に分類することができる。第一に、頻繁にはまた激しく苦しむことをしない人々、第二に、恐怖を抜け出てその先のヴィジョンへと行き着く人々、第三に、苦しみ続ける人々である」。フォースターは大部分の人間は第一の分類に属し、ドストエフスキーやブレイクのような神秘家は第二の分類に属するとする。そしてエリオットは第三の分類に入れている。エリオットには「宗教的情緒」が欠けており、「彼が求めているものは啓示ではなく安定である」とも断言している。エリオットが国家に深く根ざした教会に帰依するのも、「非個性」を希求するのも、これが原因というわけである。Elizabeth Heine ed., *Abinger Harvest and England's Pleasant Land* (André Deutsch, 1996), 90-91.

フォースターはまたエリオットが感じさせる距離について、He is difficult because he has seen something terrible, and (underestimating, I think, the general decency of his audience) has declined to say so plainly. 「彼は何か恐ろしいものを見てしまったために難解なのである。(読者の全般的人間性を過小に評価してのことだと思うが) それをはっきりと言うことを拒んでいる」と指摘している。この評論に対するエリオットの反応をフォースター自身にあてた書簡に読むことができる。Letters IV, 572-73. To E. M. Forster (10 August 1929) ... I liked the article [‘T.S. Eliot and his Difficulties’, *Life & Letters* 2: 12 (May 1929)] very much. You are right about the ‘horror’; and may be interested to know that the first quotation I chose for the *Waste Land*, before I hit on the more suitable one from Trimalchio, was a sentence from the end of *Heart of Darkness*, which you may remember, ending with Kurtz’s words ‘the horror...the horror’.

40 “Hollow Men”, IV.

41 『岩波キリスト教辞典』(岩波書店、2002年)、807.

(のたに けいじ 神戸大学教授)